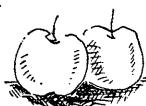


保育の中の小さなこと大切なこと⑦

—— 気にかかる子ども ——

守 永 英 子



K男は、今年の四月に入園した四歳児のクラスの子どもである。

入園当初は、朝登園してから自分の活動に入るまでに時間がかかり、部屋の中をあらあら歩く姿が見られたが、一週間もすとすっかり慣れて、彼なりの生活をするようになった。一月近く経つと、緊張がほぐれたのか、時にはあざけてややけじめがつかないこともあったが、新学期のさまざまな問題——朝母親と離れずに泣くY子、ひとりでぼつんとしていて私の手を離れると涙ぐむY子、いつも大人のそばにいて相手をしてもらいたがるM男、友だちとトラブルを起こして訴えてくるU男など——に一日迫られている私にとっては、手のかからない子どもであった。にもかかわらずK男には、何か気にかかるものを感じていた。

一学期も半ばすぎたある日、天気もよく、子どもたちが精一杯遊んだあと保育室と砂場の片づけは、大変だった。一生懸命片づけている子どもも、所在なげにうろうろしている子どもも、友だちとあざけている子どもも、さまざまな子どもたちに、それそれに声をかけながら、片づけを急いでいた。そこへ、K男が「靴下汚れちゃった。替えて」と言いにきた。見ると砂場で泥がはねたらしい。「片づけがすんでからね」と言つて片づけを急いだが、帰りの時刻が迫っていた。「Kちゃん、今日は遅くなつたから、そのままで我慢してくれる?」K男は、黙つて私から離れていった。

子どもたちに急いで帰り仕度を取りに行かせて、ほつとしたのもつかの間、T男が「Kちゃんがぶつた」と言いにきた。T男は内にこもる方であるから、と気になつて、戻ってきたK男に「Tちゃんのことぶつたの?」と声をかけた。(とがめられたという感じのないように、声の調子に気をつかつつもりで

あつた)が、K男は黙っていた。思いがけない重い反応に、私はとまどいながら方向をかえた。「どうしてTちゃんをぶつたの?」K男はやはり黙りこんだまま。事情があれば、自分の立場を言わずにはいられないだろうと思つた私の思惑は又はずれて、私は方向を失つた。帰りの時刻である。焦つた気持ちで、「お友だちをぶたないのよ。ご用があつたらお話するのよ」と言つたが、K男の抵抗は堅く、がんとしてうなずきもしない。

他の子どもたちは、仕度をすませて、腰かけて見てゐる。早く終りにして帰さなければならぬ。「お友だちのこと叩いていいかしら?」と周囲の子どもに問いかける。当然「いけない!」

といふ答え。「Kちゃんはどう思う?」と促したが沈黙。まず

いやり方だと思いながら、「Kちゃんも考えておいで」とおさめて先を急いだ。K男はいよいよ貝のよう押し黙つたまま。私の言葉がK男のからだにぶつかって、むなしくはね返つてくるのが分かつた。K男を席に着かせ「さよなら」と挨拶をしようと思つた時、私の心にさつきの靴下のことが浮かんだ。K男の望むことをあげもせずに、自分の言うことを受け入れさせようとは大人の身勝手ではなかつたか。

K男の気持ちをこのままで帰したくない……帰りの時間が遅

れてもそれには替えられない……私は、全く気持ちを切り替え言つた。「そろそろ、Kちゃんの靴下汚れてるんだったわね。

替えてあげましょうね」私はK男が靴下を替えるのを手伝いながら、もう一度そつと言つてみた。(しつこいかなと思ひながら)「もうお友だちを叩かないのよ」私の不安をよそに、K男は今度はすぐにうなずいた。私には、K男の望んでいることが少し分かつたよう思えた。

大人の手をあまり必要としないかに見えたK男に本当に必要だったのは、日常の小さな事柄の中での大人の理解ある暖かいふれ合ひだったのではないだろうか。このできことは、私を深く反省させた。

一学期末の面接の時、K男の母親は先ずこう言つた。「K男は幼稚園に入つてから目に見えて素直になりました」それから更につけ加えた。「あれで氣の弱いところがあつて、"○○した"いけどどうせだめなんでしょ」つて先に自分であきらめてしまふんです」私はその言葉を聞きながら、K男の心のどこかにさびしさがひそんでいるのが感じられた。そして氣にかかるつたことの手がかりをみつけたように思えたのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)